

令和 2 年 6 月 19 日現在

機関番号：32606
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2016～2019
 課題番号：16K02276
 研究課題名(和文)近代皇室工芸作品フローシステムの研究 新収山階侯爵家・寺内伯爵家資料の検討

研究課題名(英文)An examination of the underlying structures involved in acquiring modern kôr;gei crafts associated with the Imperial Household

研究代表者
 長佐古 美奈子(NAGASAKO, MINAKO)
 学習院大学・付置研究所・学芸員

研究者番号：20537279

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では明治期の皇室工芸作品を美術史的側面及び技術史的観点から調査し、また各種文献史料より作品の制作背景を読み解き、近代皇室関係工芸作品の来歴とその作品像、さらには皇室の日本の伝統工芸産業に対する保護育成政策を明らかにした。従来、明治期の皇室は西洋文化を一方向的に受容し、近代国家への道を歩んだと理解されてきたが、本研究により西洋文化受容の後に日本の伝統的産業による国産化への移管を図りながら日本皇室独自の近代様式化を進めてきたことを解明した。本研究の成果は、全国5カ所を巡回した「華ひらく皇室文化 明治宮廷を彩る技と美」展および関連シンポジウムにおいて広く一般に公開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
 本研究では皇室関連作品を美術史的側面及び技術史的観点から調査し、また各種文献史料より作品の制作背景を読み解き、近代皇室関係工芸作品の来歴とその作品像、さらには皇室の日本の伝統工芸産業に対する保護育成政策を明らかにしてきた。その成果をもとに報告事業として「明治150年記念 華ひらく皇室文化 - 明治宮廷を彩る技と美」展を開催し、広く一般に公開した。同展覧会は名古屋徳川美術館・秋田市立千秋美術館・京都府文化博物館・東京泉屋博物館分館・学習院大学史料館で開催し、最終的に全国で10万人以上の来館者があった。その結果、皇室の日本の伝統工芸産業に対する保護育成政策を多くの人々に周知することが出来た。

研究成果の概要(英文)：This research project focused on the Meiji period (1868-1912) kôr;gei crafts related to the Japanese Imperial Family from both art historical and technical aspects. The research team analysed production background through studying various historical document and material. The research also shed lights on the provenance and the general picture of the modern kôr;gei crafts collection associated with the Imperial Household, as well as imperial patronage of the Japanese traditional kôr;gei crafts industry. Until recently, it was generally viewed that the Meiji Emperor and the Imperial Family accepted western culture in a single-direction when Japan was promoting its modernisation. However, this research provided a new perspective that the Imperial Household helped to develop modernisation of Japan in own unique way by promoting traditional domestic industry and products once accepting the western culture.

研究分野：日本近代皇室史

キーワード：明治 皇室 工芸 国産保護 伝統文化 下賜 食器 ポンボニエール

1. 研究開始当初の背景

(1) 近代皇室関係の工芸作品は、皇室技芸員やそれと同等の技術力を持った職人が制作していることから、これまでの研究の多くは主に作品単体もしくは作家をテーマとして、美術史的側面からの調査・研究が行われてきた。またその対象も宮内庁や国立博物館等に所蔵されている献上品が主であった。こういった作品の単体研究では、歴史的背景については等閑視されていた面があることは否めない。歴史的背景の調査を困難としてきた要因には、皇室関係工芸作品には制作者銘が入れられていないことが多いこともある。このため、作品からだけでは作品にまつわる背景情報を特定することは困難な状況となる。つまり、その作品がいつ、誰から誰に対し贈られたか、それ以前にその作品は皇室・宮内省・献上者等において、どのような経緯をもって、いつ、誰に発注されたのか、その作品の意匠や制作者は誰が決定したのか、制作完成後どのように使用されたか、など歴史的背景についてはほとんど触れられてこなかったといっても過言ではない。

(2) 研究代表者と分担者の所属する学習院大学史料館には、高松宮家、山階宮家、侯爵山階家、伯爵寺内家をはじめとする旧宮家資料、旧華族家資料が所蔵されている。資料中には、皇室よりの下賜工芸品や、皇室が発注する場合と同じ制作者による工芸作品が多く含まれる。このうち下賜工芸品に関して、研究代表者は文献史料を丹念に精査することで、皇室からの下賜経緯と宮内省よりの発注経緯、それを受注した作家について解明し、研究成果を発表した(長佐古美奈子「大正期皇室下賜工芸品の発注と制作に関する一考察」、『学習院大学史料館紀要』第19号、2013)。この研究において、下賜工芸品は多くの場合、あらかじめ制作者(作家)に発注しておき、完成後は予備品として皇室に備蓄され、必要に応じて、下賜対象者の功績に見合った作品を選定し、下賜していることが判明した。

(3) 皇室からの下賜品は、近世期以前では生絹が主であった。しかし、明治期以降には工芸作品が多く用いられるようになった。ここには皇室の工芸制作者に対する保護育成の面があったと考え得る。その事例として、ボンボニエールを上げることが出来る。ボンボニエールとは、明治中期より皇室、華族家などの慶事に際し、小さな菓子を入れ、下賜品・引き出物としてふるまうために制作された小さな工芸作品である。ボンボニエールとはフランス語でボンボン入れを意味する言葉だが、我が国では、皇室の慶事や外国賓客を招いての正餐の際に、それを象徴するおめでたい器物として使用された。ボンボニエールの素材には銀が多用され、繊細な金工技法を以て日本の伝統的な意匠を表面に施している。明治期から昭和戦前期にかけて皇室のみならず宮家や華族家で盛んに制作配布された、日本独自の発展を遂げた特異な工芸作品である。ボンボニエールの配布には、日本の伝統文化の継承と刀剣装工などの伝統技術保護育成、さらには工芸技術を外国へアピールする意図があったのではないかと考えられる。研究代表者は「ボンボニエールを読み解くー歴史資料としての視点からー」(『学習院大学史料館紀要』第21号 2015)において、その側面を指摘している。

(4) これらの経緯から、近代皇室関連工芸作品の成立から使用・下賜に至る過程を明らかにすることで、当時の皇室の工芸作品に込めた意図を解明できるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

(1) 本研究は皇室関係の工芸作品に対し、今までの美術史的視点に加え、**技術史的視点、歴史資料からの視点を加えた3方向から工芸作品を読み解き、その作品が「いつ、どこで、誰に、いくらで発注され、誰に下賜されたのか」「意匠は誰が決定したか」など、近代皇室の工芸作品の成立から使用(下賜、配布)に至る過程(フローシステム)を明らかにすることを目的とした。**

(2) さらに、この工芸作品(下賜品、宮中で使用される食器、引出物であるボンボニエール等)の制作過程を明らかにすることで、**美術工芸品制作に対する皇室の意図、ひいては皇室の工芸制作者(国産品)に対する保護育成の意図**をさらに明確化しようとするものである。

3. 研究の方法

本研究は、歴史研究者と美術史研究者、技術史研究者の3者が連携しながら進めた。

(1) まず、皇室側の史料として、宮内庁宮内公文書館に所蔵されている膨大な公文書のうち、『予備品録』『贈賜録』『御用度録』『用度録』等約800冊の簿冊史料を閲覧・撮影した。さらに、この中より皇室工芸品関係の史料部分をピックアップするという作業を行った。

(2) 皇室より下賜品を受け取ることの多い皇族や華族家の動向をみるための文献史料として、学習院大学史料館所蔵の山階宮家史資料、侯爵山階家資料、伯爵寺内家史料のリスト(目録稿)作成作業を行った。平成29年(2017)10月には伯爵寺内家より資料の追加寄贈を受けたので、研究分担者の千葉功を中心にリスト(目録稿)作成作業及び翻刻作業を行った。

(3) 宮家(高松宮家、三笠宮家) 旧宮家(北白川宮家、山階宮家等) 旧華族家(内山家、寺内家等)に所蔵されている下賜品や食器、ボンボニエール等皇室関連作品の実見調査を行った。工芸品のうち、漆工作品については、研究協力者小松大秀が多くの作品調査にあたった。また、平成28年(2016)6月には三笠宮家より崇仁親王が幼少期日光田母沢御用邸で使用していた和食器類1000点余の寄贈を受け、そのリスト化と実見調査を研究分担者の吉廣さやかが担当した。

(4) 上記(1)~(3)の調査により、明治期宮中晩餐会で使用が開始され、さらに現在も継続して使用されている皇室洋食器の生産地が佐賀県有田町の陶磁器製造会社深川製磁、香蘭社であることが確実にされたため、研究分担者吉廣さやか、研究協力者森谷美保・長佐古真也と共に同地で制作者側の歴史的資料や作品の技術史的な観点からの調査を行い、皇室洋食器の国産化成立過程を明らかにすることが出来た。

(5) そのほか皇室関係工芸作品、ボンボニエールなどについても同様の方法にて調査を行った。

(6) 調査・研究の過程で「華ひらく皇室文化 明治宮廷を彩る技と美」展(華ひらく皇室文化展実行委員会主催)を開催することが決定し、その準備として、より多くの宮家、旧宮家、旧華族家に所蔵されている下賜品や食器等皇室関連作品の調査を行うこととなった。調査には研究協力者小松大秀・岩壁義光・森下愛子などの協力を得た。具体的には、各所蔵館・個人の皇室関連作品の実見調査及び来歴の文献史料調査を行い、展覧会に出品するものについてはデジタル撮影、作品解説の執筆等を行った。

(7) 海外との関係については、韓国において「李王家美術品製作所」の作品実見と文献の調査を行った。特に李王家ボンボニエールに関連しては、文献の翻刻作業も行った。また、アイルランド・チェスタービーティライブラリーのメアリー・レッドファーン博士との共同研究を行ったことにより、英国王室と日本皇室との関連というより広い視点を得ることが出来た。

4. 研究成果

本研究では宮家、旧宮家、旧華族家に所蔵されている下賜品や食器、ボンボニエール等皇室関連作品、特に明治期の皇室工芸作品を美術史的視点及び技術史的視点から調査し、また各種文献史料より作品の製作背景を丹念に読み解くことで、近代皇室関係工芸作品の来歴とその作品像を明らかにした。さらにはそこから皇室の日本の伝統工芸産業・日本の伝統文化に対する保護育成政策を明らかにすることが出来た。

(1) 研究の方法(1)(2)の成果として、学習院大学史料館所蔵の山階宮家史資料・侯爵山階家のリスト(目録稿)作成作業を行い、その一部を研究分担者吉廣さやかが「山階芳麿博士資料目録〔工芸部門〕一、漆工」(2019)を成果として公表した。当該部分以外もこの後順次公開予定としている。

平成29年(2017)10月には伯爵寺内家より資料の追加寄贈を受け、研究分担者千葉功が当館所蔵の寺内家資料及び寺内関連他所所蔵史料と共に『寺内正毅関係文書<1>』(東京大学出版会、2019)を刊行した。

(2) 研究方法(3)(4)の成果として、旧宮家に残る皇室下賜品の調査から、研究協力者小松大秀は、旧宮家所蔵下賜品である漆工品を調査し「近代皇室漆芸遺芳(一)植松抱民作 真木立山絵硯箱」(2017)、「近代皇室漆芸遺芳(二)雲立湧双鳥唐草文蒔絵掛硯/藤亀甲蒔絵堤重/花卉草花円文蒔絵漆絵菓子器」(2018)、「近代皇室漆芸遺芳(三)薔薇蒔絵螺鈿硯箱/朱樂製蒔絵蓑入/藤尾長鳥蒔絵堤重」(2019)を公表した。

研究分担者の吉廣さやかは、明治・大正・昭和期にかけての宮中杖とその杖料の下賜について歴史的視点と技術史的視点からの調査を行い、その実態を明らかにし「宮中杖/鳩杖の明治・大正・昭和」(2017)として公表した。

研究代表者の長佐古美奈子は明治初期の下賜工芸品に見られる「布」、特に琉球関係織物について、明治皇室工芸品の中で琉球工芸品が果たした役割について調査し「明治初期皇室の贈答行為に関する一考察 主に美術工芸品について宮内省記録から概観する」(2019)を発表した。

研究代表者長佐古美奈子と研究協力者長佐古真也は、現在も宮中晩餐会で使用されている食器・ガラス器について、旧宮家等に現存する製品調査、生産地での調査、技術者への聞き取り、宮内公文書館史料、海外文献の調査を行い、総合的成果として、長佐古美奈子・長佐古真也「近代宮中における国産磁器洋食器の成立過程」(2017)、「明治八年英国に発注された宮中正餐用洋食器について：近代宮中における国産洋食器の成立過程(2)」(2018) 長佐古美奈子「宮中晩餐会の歴史的考察その(一) 現在に続くイギリス風の導入」(2019)として公表した。

(3) こういった調査研究の成果を総合的に読み解くと、従来、明治期の皇室は西洋文化を一方向的に受容し、近代国家への道を歩んだと理解されてきたが、本研究により例えば明治宮殿や延遠館等の皇室接遇施設の調度品・食器等の製作や宮中での

洋装導入に関し、西洋文化受容の後に日本の伝統的産業による国産化への移管を図りながら日本皇室独自の近代様式化を進めてきたことが解明できた。この背景には明治10年(1877)の第一回内国勸業博覧会を契機とした皇室の殖産興業や伝統工芸製作者に対する保護育成政策があることが明らかになった。その政策は天皇・皇后の行幸啓の折の御買上品や臣下への下賜品においても確認できた。

現在まで続く宮中晩餐会の様式を解明したこともこの研究の大きな成果と言えるだろう。宮中晩餐会は、明治初期に英国正餐式のフランス料理を導入し、その食器は明治8年(1875)に輸入した英国製を使用していたが、その後、フランス製洋食器を見本としたものを国内で製作し、使用されるようになった。明治22年(1889)の憲法発布式では何百人もの陪食者がこの国内製作洋食器でフランス料理を食したが、その食器と食事様式は現在まで継続している。さらに皇后や皇太子の正装は明治20年頃(1887)頃より洋装化されたが、生地や縫製、刺繍などには国産品を用いたことも確認することが出来た。

このように研究代表者、研究分担者はそれぞれ多くの研究成果を発表したが、その中でも本研究の成果総括と言えるのが「華ひらく皇室文化 明治宮廷を彩る技と美」展とシンポジウムの開催である。

同展は平成30年(2018)4月より令和元年(2019)5月までの間、名古屋徳川美術館、秋田市立千秋美術館、京都府文化博物館、東京泉屋博古館分館、学習院大学史料館を全国巡回し、広く一般に皇室関連工芸作品等を公開すると共に、図録『華ひらく皇室文化 - 明治宮廷を彩る技と美』(青幻社、2018)(図1)を刊行し、各地で研究発表等も行った。同展覧会は全国で10万人以上の来館者を得、国内・海外メディアにも多く報道された。さらに平成31年(2019)4月開催のシンポジウム「明治の美術工芸と皇室が果たした役割」においては各分野の研究協力者が発表・討論をおこない、研究代表者が総括・司会を務めた。シンポジウムの内容は冊子として印刷・配布を行った(図2)。

この展覧会を通じて、多くの人々に皇室関連工芸作品の存在とそれが制作された意図を広く周知することが出来た。



図1 『明治150年記念 華ひらく皇室文化 - 明治宮廷を彩る技と美』(青幻社、2018)

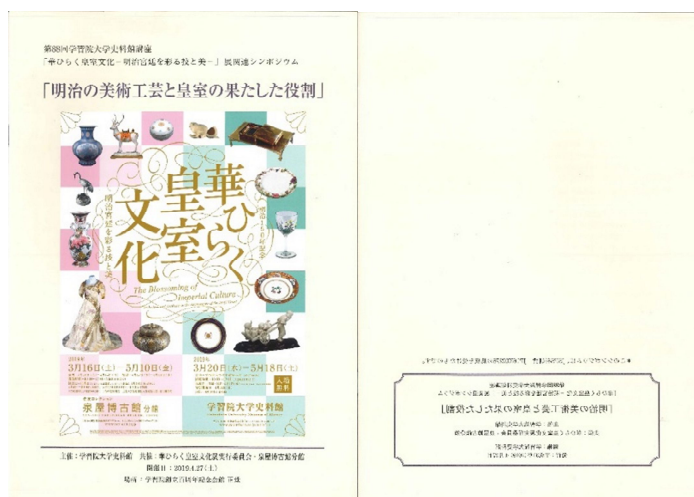


図2 シンポジウム「明治の美術工芸と皇室が果たした役割」配布冊子(学習院大学史料館、2019)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 長佐古美奈子	4. 巻 19
2. 論文標題 史料より読み解く近代皇室使用の国産洋食器の成立過程	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 近代陶磁	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長佐古美奈子	4. 巻 25
2. 論文標題 「明治初期皇室の贈答行為に関する一考察 主に美術工芸品について宮内省記録から概観する」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学習院大学史料館紀要	6. 最初と最後の頁 7-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉廣さやか	4. 巻 19
2. 論文標題 山階芳麿博士関係資料目録〔工芸分野〕漆工編	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 学習院大学史料館紀要	6. 最初と最後の頁 33-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 長佐古美奈子	4. 巻 3月号
2. 論文標題 皇室の菓子器「ボンボニエール」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 砂糖類・でん粉情報	6. 最初と最後の頁 2-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 長佐古美奈子	4. 巻 24
2. 論文標題 明宮嘉仁親王（大正天皇）所用学習院制服を巡る一考察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 学習院大学史料館紀要	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 長佐古美奈子・長佐古真也	4. 巻 24
2. 論文標題 明治八年英国に発注された宮中正餐用洋食器についてー近代宮中における国産洋食器の成立過程2	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 学習院大学史料館紀要	6. 最初と最後の頁 175-187
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉廣さやか	4. 巻 24
2. 論文標題 学習院所蔵の乃木希典遺書とその周辺	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 学習院大学史料館紀要	6. 最初と最後の頁 197-212
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 長佐古美奈子・長佐古真也	4. 巻 23
2. 論文標題 明治皇室の洋食器の成立と展開	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 学習院大学史料館紀要	6. 最初と最後の頁 109-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長佐古美奈子	4. 巻 17
2. 論文標題 ボンボニエールと明治皇室文化	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 神園	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉廣さやか	4. 巻 23
2. 論文標題 宮中杖/鳩杖の明治・大正・昭和	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 学習院大学史料館紀要	6. 最初と最後の頁 139-158
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 長佐古美奈子	4. 巻 26
2. 論文標題 宮中晩餐会の歴史的考察その(一) 現在に続くイギリス風の導入	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学習院大学史料館紀要	6. 最初と最後の頁 21 - 41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 長佐古美奈子	4. 巻 1
2. 論文標題 工芸に関する御用品、下賜品、御贈与品等の御用を時々堪能の技術家へ仰付けらるべき	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 明治の美術工芸と皇室の果たした役割	6. 最初と最後の頁 14 - 15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 長佐古美奈子
2. 発表標題 史料より読み解く近代皇室使用の国産洋食器成立過程
3. 学会等名 近代国際陶磁研究会大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 長佐古美奈子
2. 発表標題 明治皇室の贈答行為に関する一考察 - 宮内省記録を中心に
3. 学会等名 東アジア近代史学会第172回研究例会（学習院大学）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 長佐古美奈子
2. 発表標題 明治皇室の洋食器 現在に続く精磁会社の系譜
3. 学会等名 無形文化遺産（伝統技術）の伝承に関する研究会 「現在に伝わる明治の超絶技巧」（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 長佐古美奈子
2. 発表標題 宮中晩餐会の食器と精磁会社
3. 学会等名 明治有田 超絶の美 万国博覧会の時代 展（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 長佐古美奈子
2. 発表標題 宮中晩餐会とボンボニエール
3. 学会等名 徳川美術館春季講演会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小松大秀、森下愛子、長佐古美奈子ほか
2. 発表標題 明治の美術工芸と皇室の果たした役割
3. 学会等名 華ひらく皇室文化展関連シンポジウム
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 寺内正毅関係文書研究会	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 576
3. 書名 寺内正毅関係文書 1	

1. 著者名 小松 大秀ほか 華ひらく皇室文化展実行委員会	4. 発行年 2018年
2. 出版社 青幻舎	5. 総ページ数 213
3. 書名 華ひらく皇室文化：明治宮廷を彩る技と美：明治150年記念	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	吉廣 さやか (YOSIHIRO SAYAKA) (30726584)	学習院大学・付置研究所・学芸員 (32606)	
研究分担者	千葉 功 (CHIBA ISAO) (50327954)	学習院大学・文学部・教授 (32606)	
研究協力者	小松 大秀 (KOMATU TAISHU)		
研究協力者	長佐古 真也 (NAGASAKO SHINYA)		
研究協力者	森谷 美保 (MORIYA MIHO)		
研究協力者	森下 愛子 (MORISITA AIKO)		
研究協力者	岩壁 義光 (IWAKABE YOSHIMITHU)		